

玉葛の跡：本居宣長「菅笠日記」に見る一古典研究者像

板坂， 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12046>

出版情報：語文研究. 52/53, pp.81-93, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



玉 葛 の 跡

——本居宣長「菅笠日記」に見る一古典研究者像——

板 坂 耀 子

一

明和九年三月七日、本居宣長は数人の弟子（覺性院戒言・小泉見庵・稻懸棟隆・その子茂穂・中里常雄）とともに、初瀬を訪れた。後に「菅笠日記」の紀行文を生む、吉野紀行の途次である。

四十三才の宣長にとって、この旅行は、「菅笠日記」冒頭に記した如く、二十年余の念願であった。後に寛政十二年「枕の山」で桜の歌三百首の集を編み、「すべて春は雨のふるまへには深く霞み。雨の後は霞のはるゝ物なる故に。山の花のさだかに見ゆる也。」（草庵集玉簪）などと、和歌の解釈の際にも花に対する細かい観察を示す彼にとって、吉野は憧れの地であったし、その水分神社は、「家のむかし物語」に彼が自ら記す如く、父母がその神に祈願した結果、彼が生まれたという、関り深い神であった。「花見にかこつけての参詣は少し失礼かもしれぬが、他のことのついでよりはお許し下さるだろう」と「菅笠日記」に述べるように、この神社への参詣と花見とが旅の日記の中心だったと見てよい。

しかし初瀬も彼には関心深い場所であった。この少し前の成立かという「続草庵集玉簪」に「はつせ山さくらにしらむ」の歌について、この地の花や鐘の音に関する詳細な考察がある。更に「倭文ハ源氏ニ過ル物ナシ」（あしわけをふね）と彼が嘆賞した源氏物語とも切りはなしたい地名である。

「菅笠日記」中、初瀬は、出発後の雨に苦しんだ山路の数日間の後に、あたかもこの紀行全体の中心となる吉野の序曲のような明かい小景をなしている。宣長はここで、

「巳の時とて。貝ふき鐘つくなり。むかし清少納言がまうでし時も。俄にこの貝を吹いでつるに。おどろきたるよし。かきおける。思ひ出られて。そのかみの面影も見るやう也。鐘はやがてみだうのかたはら。今のぼりこし。くれはしの上なる楼になんかゝれりける。（中略）ふるき歌共にも。あまたよみける。いにしへの同じ鐘にやと。いとなつかし。かゝる所からは。ことなる事なき物にも。見きくにつれて。心のとまるは。すべて古へをしたふ心のくせ也かし。」

と、古典と共通の世界を見る喜びを語る。更に近くを見回る内、

小川の対岸に「玉葛の君の跡」なる庵があると知り、玉葛の墓もそこにあると聞いて、次のように述べる。

「すべて比はつせに。そのあとかの跡とてあまたある。みな誠しからぬ中にも。この玉葛こそ。いと／＼をかしけれ。かの源氏の物語はなべてそらごとどもわきまへで。誠にありけん人と思ひて。かゝる所をかまへ出でたるにや。」

ほぼ同様のことを宣長は「紫文要領」「源氏物語玉の小櫛」でも述べる。また「菅笠日記」の他の部分でも、同じ初瀬の定家の塔という五輪を「此ごろやうの物にて。いとしもうけられず」、吉野の義経の籠ったという塔を「すべてさることはゆかしからねば。目とゞめても見ずなりぬ」と批判するなど、新しく作られたもの、卑俗な伝説にまつわるものの拒否を常には示しており、この一文もそれと共通する。

いささか逆説めくが、ここで問題としたいのは、彼の物語観からしても何の価値も認められないはずの「玉葛の跡」ひいては同種の卑俗な伝説や事実の数々を、否定しつつもなぜ彼が記してしまうかである。たとえそれが現実に見聞したことであっても、紀行文に記す際の取捨選択は作者にまかされる。宣長と同行した本居大平の、同じ旅の紀行「餌袋日記」は全体の量が少ないこともあるが、初瀬で玉葛の庵にはふれていない。

宣長自身「目とゞめても見ずなりぬ」と義経伝説を記さず、吉野で西行の歌として伝わるものを聞いたとき「むげにいやしきえせ歌也」とのみで、歌そのものを記さない。その姿勢をより徹底させるなら、初瀬においては貝と鐘の音のみに古へをしのお自らの姿を描いて、玉葛の跡などは黙殺してもよいはずである。事実、宣長のこ

の記述は、前半の「貝と鐘」に象徴される部分の効果を減じているのは否めない。

同様の姿勢は、この紀行中に他にも散見する。「古へをしたふ心」に基いて、土地に感情移入しようとするのを、妨げる興ざめな現実が、むしろ克明に記される。最も印象深いのは、下巻のちごろ、三瀬の宿で登場する、「じんにくん」の条であらう。

「猶このちかきあたりのことども。とひきかまほしくて。まづ此宿のあるじよび出たる。年のほど五十あまりと見えて。ひげがちにかほにくさげなるが。おもうちこわづかひむべ／＼しうもてなしつゝ。いでこのわたりのめいしよこせきはと。いひ出るよりまづをかしきに。わかき人々はえたへずほゝゑみぬ。この東なる山に。塚穴とてあるは。いかなる跡にかととへば。かれは聖徳太子の御し時に。弘法大師のつくらせ給ふとかたるには。たれもえたへねど。なほ何事かいふらんと。さすがにゆかしければ。いみしうねんじて。さはいみしき所にも侍るかな。深さはいくらばかりかととへば。おくはかきりも侍らず。奈良の寒さの池まで通ってこそ侍れといふ。そもその池は。いづこばかりにあるぞととへば。興福寺の門前に。さばかり名高くて侍る物を。しらぬ人もおはしけりといふにぞ。心得てみな人はころびわらふ。さて敵火山の事かたるついでに。神功皇后の御し事を申すとて。じんにくんといへるこそ。よろずよりもをかしかりしか。それより此あるじをば。じんにくんにつけて物わらひのくさはひになんしたりける。こゝには神の御社やなにやと。たずねまほしき所々おほかれど。かゝるには何事かとはいれん。いとくちをしこそ。」

古へが正しく伝えられていない現実に対する、「玉葛の跡」と共通する幻滅がここにはある。しかし同時にその幻滅すべき現実を描写する宣長の筆には、反感だけとはいひ難い力がこもる。この部分の文体は擬古文とはいへぬきれよく、漢文脈や俗語体をしのばせるものすらある。おそらくこの部分を念頭におかれてであろう、鈴木棠三氏は「近世紀行文芸ノート」で「菅笠日記」を近世紀行中「上乘の作」と高く評価された際、「時にはユーモラスな筆をまじえて、味読に価する作品」と評された。「じんにくん」の存在は、この紀行の重要な要素の一つとなっているのである。

「菅笠日記」は板行の際上下二巻になっており、上巻は吉野の花見、下巻は奈良の天皇陵探訪を主要な内容とする。しかし前述の「じんにくん」の記事が、その内容と異和感なく、唐突な印象も与えないのは、この紀行全体にわたって、同様の、「古へをしたふ心」を否定する興ざめな現実の指摘が、くりかえし記されているからである。

それは宣長の、この旅のしかたそのものとも無関係ではない。

宣長はこの旅行中、書物によるそれぞれの土地に関する自らの知識を確認するため、その土地の住人に質問するという方法を終始実行した。「玉勝間」巻十二に「われから」の虫を漁夫らが今も熟知することを記し、

「そもく此物は、今もかく、たしかにてある物なるを、ものしり人たち、くさくの説有て、さだかならざるやうなるは、たゞ書のうへにのみかゝつらひて、そのまことの物のうへを尋ねることなきが故也。」

と、書物の上の知識のみに頼ることを批判した宣長には当然のこと

とだったかもしれない。

「倉橋の里に出ぬ。しばしやすみたるほどに。大人は。御陵の事な。たづね給ふ。」

と「餌袋日記」に大平は記す。「菅笠日記」中にも、

「猪養の岡。又御陵な。事の。かごかけるをのこに問へどしらず。里人にたづねるにも。すべて知らぬこそくちをしけれ。」

「此くろざきに。家毎に饅頭といふ物をつくりてうるなれば。かのふりにし宮どもの事たづねがてら。あるじの年おいたるがみゆる家見つけて。食ひに立ちよる。さてくひつゝ問ふに」

「しばしやすめる家にて。例の都のあとを尋ねれば。あるじ。この里中に金福寺という寺ぞ侍る。このおはしける道なる物をとて。子にやあらん。十二三ばかりなるわらはをいだし。あないせさす。」

「こゝはをさく見にくる人もなき所なれば。道しるべするものだに。さだかには知らず。そのあたりの田つくる男な。に問い聞きつつ行きて見るに」

「かの酒のみゐたりし里人どもも。こゝに来て。国はいづくにかおはするな。と問ひつゝ。此山のふることどもな。どかたりいづる。いとゆかしくて。耳とめてきけば。大かたこゝによしなき神代のことのみにて。さもと覚ゆるふしもまじらねば。なほざりに聞きすぎしぬ。されど見えわたるところを。そこかしこ問ひきくには。よき博士なりけり。」

「猶さだかに聞かんと思ひて。例の里のおいびとたづねて問

へば。第十八代のみかどのみさゞき。御名は何とかやのとて。しば／＼うちかたぶくを。いな十八代にはあらず。八代孝元天皇よといへば。おいさり／＼とうなづく。物とはんとて。かへりてこなたより教へつるもをかし。」

「さて吉田村にて。例の翁かたらひ出て。御陰井上御陵をたづめるに。このおきな。あるが中にもすべての御陵の御事をよく知りをりて。こまかに語る。」

と、その実態がしのばれる。この他にも、村の翁、寺の法師、里人らから彼が土地の古跡について聞いている部分は三十ヶ所余にのばり、この量の紀行としては異常に多い。他の近世紀行でも、たとえば大田南畝「改元紀行」、橘南谿「東西遊記」、更に芭蕉の諸紀行などに、語りかけられる里人が登場し、印象深い存在となることはある。しかし数の上でも「菅笠日記」と比較にならぬし、また里人との接触が、全く記されぬ紀行文も多い。

ところで「菅笠日記」の場合、この多くの質問は、
「例の翁たづねいでて。いにしへの事ども問へど。さだかに
は知らず。」

「たしかには里人もしらずなん有りける。」

「里人のつたへも。もはらたのみがたくこそ。」

「榎葉井はいづこぞとたづぬれど。知れる人もなし。」

「しるべのをのこもしらぬよいへり。」

などあつて、大半に、満足すべき答は得られない。これらの記述のくり返しによって印象づけられるのは結局、それぞれの土地における古代の忘却と歪曲である。「じんにくん」はその最も徹底した例として登場している。

その事実に対する宣長の姿勢は、時に「くちをしけれ」「くちをしくこそ」であつても、一方で「をかし」と言うように、余裕があつて、「古へをしたふ心」と必ずしも一致しない。したがって初瀬の場面に見るように、古典の世界と一致していく感動はともすれば相殺され、薄められるのである。

宣長にその点の配慮はなかったのか。そもそもどのような意識で彼は、紀行文を記しているのか。

注

- (1) 後の本居大平。
- (2) 松原滋「本居宣長の思想と心理」（東大出版会）も彼の様に対する関心の深さについて述べる。その他、彼と桜についてふれる書は多い。
- (3) 「さてついでにいひむ、五条に夕白ノ君の跡、須磨ノ浦に、源氏の君の跡、長谷に玉かつらの君の跡、などいひてあるたぐひは、みな事好めるものの、つくりものがたりぞといふことをだに、わきまへざるしわざ也、これらはむげにをさなき事なれば、人のまどふべきにもあらざるを、かくいふは、たゞうひまなびのために、おどろかせるのみぞ」（玉の小櫓）。「紫文要領」の記事もほぼ同一である。

二

宣長は、その生涯に主なものだけで十三回の旅をしている。寛保二年、十三才で水分神社へお礼参りをした旅をその初めとして、延享二年の京都旅行、同年江戸旅行、寛延元年多賀参詣旅行、明和九年の吉野旅行、寛政元年名古屋旅行、同二年京都旅行、同四年名古屋旅行、同五年京都旅行、同六年名古屋旅行、同年和歌山旅行、同十一年と十二年の和歌山旅行、享和元年、七十二才の最後の京都旅行である。

この内、紀行文が残っているのは、明和九年の吉野旅行（「菅笠日記」）と、寛政五年の京都旅行（「結びすてたる枕の草葉」）、同六年の和歌山旅行（「紀見のめぐみ」）のみである。しかも井上敏幸氏の定義を利用するなら「道の記」と呼ぶべき古典的伝統的長編紀行の形態をとるのは「菅笠日記」のみで後の二つは井上氏の「狭義の『紀行』」の系列にはいる、詞書と和歌を並べていくだけのもので城福勇氏は「紀行和歌集」と称されている。²⁰⁾

ただしそれぞれの旅の際に、宣長は、通常彼が記している日記とは別の旅行日記を記すことはある。いわゆる「寛政四年名古屋行日記」「寛政五年上京日記」²¹⁾「寛政六年若山行日記」「寛政十二年紀州行日記」「享和元年上京日記」²²⁾がそれである。他に、「紀見のめぐみ」の初稿本と見られる「木路の口すさみ」がある。また「寛政五年上京日記」は、その中に「結びすてたる枕の草葉」の初稿を含んでいる。

だが、これらはいずれも、和歌や、紀行めいた部分を含むことはあっても雑記や備忘録といった記事が多く、それ自体として一つの作品にはなっていない。宣長自身、平常の日記中で例えば「若山行日記」「紀州行日記」をさして、「○今度若山行、委曲有『別記』」²³⁾「○因御用二行三若山、委曲如『別記』」と述べる時、それは他の平常の諸行事である婚礼や法要の際の事務的な記録である、「能登婚姻録」あるいは「清響光雲惠勝法尼卅三回忌取越」をさして、「委曲如『別記』」と言う以上の意味を、持っているとは思えない。後にそれらの、雑記めいた旅の記録の中から、和歌だけの部分がいくつか抽出されて、まとめられたとしても元来宣長自身には、旅の期間を日常とくに異なるものととらえて、一つの文学作品としてまとめあげようとする姿勢は弱かったのではないかと思う。

「菅笠日記」も、紀行文として整っている印象を受けるが、よく見れば内容はかなり雑多である。後に、谷川士清宛の書簡で、宣長はこれを「よし野紀行」と言っているそうだが、制作の段階では、旅の文学というよりも、その名の通り、雑記めいた「日記」としての意識で、書いていたのではないか。

周知の如く宣長には、日記、雑記、家計簿、門人録といった、日々の生活の精細に關しての記録の類がおびただしい。そこに宣長の、生活者としての強さを見る人もいる。²⁴⁾そして宣長において、少なくとも「菅笠日記」は、たとえば彼が、研究者として記し続けた「古事記伝」をはじめとする学問上の著作や、文学者あるいは芸術家として詠み続けた多くの和歌の詠草類よりは、彼の生活上の雑記、雑録の中に位置するものであらう。

これは例えば宝暦六年から七年にかけて、ほぼ六年にわたる京都遊学生活の最後に、従来の漢文を和文にかえて彼が記した「在京日記」を見れば、より明確である。

これは従来、宣長の日記の一部として扱われ、板行もむろんされていない。だが、その内容は日常の記録でありながら、文体に一種の緊張があつて、「菅笠日記」と非常に似かよっている。

「十九日、景山先生と東山の花見にまかりぬ、（中略）双林寺はまた盛ならず、此寺に西行庵とてあり、いまた見さりしか、けふ立よりて見れば、草の庵に西行法師の像を安置させるよしにて、西行の旧跡にて、頓阿法師のきさめる像と也、はか／＼しくすむ人もなきなるへし、いと風流ならぬ所也、花はあれと、所からにや、おかしからぬさま也、それより高台寺にまかりて見侍るに、天神のかたはらなる花、盛ちかく見えたり、

大かた廿日すきには盛るへし、こゝにてしはしやすみ侍る、景山先生の歌よみ給へる

みよし野のおくゆかしさも咲つゝく花をみやこの山にわすれて
やつかれかかへし

わするてふ吉野のおくはしらぬみにみやこの山そ花はめてたき」(在京日記一)

「廿六七日ころになりぬれば、諸人いとせはしうしてさき侍る、(中略)けつりかけとて、祇園へ人々まうて侍る、予もまいりける、こよひはいとさむき夜にて、社の内の手水鉢にかゝり侍るに、水みなこほりて、露ほとも手あらふ水なし、みな人むなしうして、手あらはて押し侍らんかし、」(同上)

日付にしたがいと歌を混えて和文で記していく形式も、また文体や記事の種類も、「菅笠日記」とは共通の性質を持つ。

宣長が、旅を他の日常と明確に区別して意識できず、旅の文学としての紀行文の形式を充分に把握できなかった理由の一は、彼が地方出身者だったこと、ひいては近世を通じての文化の地方化であろう。中世以前の紀行文作者ほど確実に近世の旅人たちは都と辺土を認識できず、旅の起点と終点を定められない。旅行記とも逗留記ともつかぬ作品が増加するのもその為である。旅先の土地を確実に辺土であり異郷であると意識できれば、長期滞在してもその日々の記録はやはり旅の記となり得よう。しかし特に地方出身者が都に滞在する場合、それを旅とは、自他ともにとらえつづけない。⁽⁶⁾

その観点に立つときに、「在京日記」と「菅笠日記」の差は、更に一段と縮まるだろう。即ち、京都遊学の六年間を、宣長の異郷における旅の日々であったとするなら、その最後の一年余にわたって

記された前者は、一つの紀行文でもあり得る。そして前者が「つく／＼おもへは、やつかれか京のすまひもとしかさなりぬ」と初めに記し、後者が「そも／＼この山分衣のあらまはしは。廿年ばかりにも成ぬるを。」と記すように、ある熟成と昂揚があった時、類似の心境の中で、この二作は記されたと思う。それは、過ぎ去ってゆく日々を、すぐれた表現で書きとめておこうとする精神の緊張を生むが、あくまでも母胎は日々の生活記録の意識であり、緊張がゆるめば再び雑記や雑録の中に埋没してゆく。それが「菅笠日記」以後の旅行日記の姿であろう。

一方でまた宣長は、より文学的なものとして「日記」を考へる場合でも、そのような生活上の日常の記録の中への埋没を、警戒しないようである。彼の紀行文観を示すものとしてまずあげられるのは「菅笠日記」中の、

「そも旅路の日記に。かゝるさかしらはうるさきやうなれど。筆のついでに聊か書きつけるなり。」

「すべてかうやうのところ／＼も。後にふるき書どもかむがへあはせなば。その跡とさだかに知らるゝやうもありぬべけれど。さまで物せんも。旅路の日記にはくだ／＼しければ、例のもだしぬ。」⁽⁷⁾

の二文であらう。前者は吉隠の地名の考察の後に記されたものである。これはいずれも度をすぎた考証への否定であって、研究上の著作と紀行文を区別しようとする意識であらう。しかし単なる日記や雑録に墮してゆくことへの否定は見えない。そもそもそこから発生したからやむを得ぬという認識以上に、あるいは古くからの完成された文学としての「日記」と、このような雑記としての生活

記録を、どこかで重なるものとして、宣長はとらえていたのではないかと思う。

宣長は源氏物語について、「玉の小櫛」巻二で、

「めずらしくおどろ／＼しく、めさむるやうの事は、をさ／＼なくて、はじめよりをはりまで、たゞよのつねの、なだらかなる事の、同じやうなるすちをのみいひて、いと長き書なれども、よむにうるさくおぼゆることなく、うむことはなくてたゞつゞきゆかしくのみぞおぼゆるかし。」

と、平凡で変化の少ない日常が興味深く書き続けられていくことを重視する。もとより源氏物語は散文において宣長の理想であり、また「紫文要領」中「大意之事」上で、源氏物語の中に見える「物語」の語を連記して、その使用例から物語論を展開する際、彼が何の断りもなく、光源氏の須磨の日記をさす「旅の御日記」をそのまま「物語」の一例としてあげていること、「真暦考」「真暦不審考弁」で「作物語」と「実ノ日記」を区別しつつもおよそ同一のものとして扱っていること、などから、それほど異なる基準で彼が旅の日記を考へるとは思えない。更に、宣長は、

「古へのみやびたる有さまを、見るべき物は、まことに此物語なれども、そは後の世に、よむ人のうへにこそあれ、はじめより、さる事を見せむとて書るにはあらず」（玉の小櫛巻二）

「人情は古今貴賤のへたてなしといへとも、其時処の風儀と境界とにつれてかはる事もあるものなれば、物語は其時の風儀、其人の境界をよく心得て其人の心になりて見されは、あやしき事もあり。」（紫文要領）

といった、時代の変化への意識を持ち、

「案^{アン}の事の多く見たるは、今の世の人の、さみせんじやうるなどいふ物を、おもしろきことにして、もてあそぶと、同じことにて」（玉の小櫛巻二）

のように、源氏物語の世界と自らの時代の共通する本質をつかめる人である。源氏物語の平凡な日常の流れの描写を評価する以上、一見源氏物語の世界とは遠い卑俗な現実も含めた雑多な日常のすべてをとりこんだ、雑記に近い日記として、紀行文を記しつづけることに、おそらく強い否定の姿勢を、彼は持てないはずである。

以上のように考えるとき「菅笠日記」は、旅という特異な状況を緊張をこめて記す紀行文というより、日常の日記、それもきわめて生活記録的な雑記や備忘録に近いものとして書かれたものと、私は見たい。表現は優雅な和文だが、一つの文学作品を完成させようとする意図は宣長には薄く、作者の興味をひいた事柄のすべてが、全体の構成や、紀行文としての形式をさほど意識することなく、記録として書きとどめられた。したがって、それらの記事が相殺しあつて感興がそがれる場合もあり、また結果として卑俗な現実の数々が充分批判もされぬまま多くとりこまれることとなった。宣長が後に板行の際、稿本に⁽⁹⁾

「大かた此日記よ。たゞ物の心もしらぬ里人な^レどのいふを。きけるまゝにせる事し多ければ。かたりひがめたる事もありぬべし。又聞きたがへたるふしなども有るべければ。ひがことどももまじりたらんを。後によくかむがへたゞさむことも。物うくるさくて。さておきつるを。後みん人。みだりなりとな怪みそ。これはかならずこゝにいふべき事にもあらねど。思ひ出でつるまゝになん。」

の一文を挿入しているのも、あるいは執筆態度の自由さが、その段階では気にかかって来たのかもしれない。

それでもなお板行したのは、前述のような漢とした物語観にも支えられた自信は彼にあったのだらう。事実、「菅笠日記」の多くの記事は、矛盾しあって効果を減じ、紀行文の名作の多くが持つ詩的緊張を欠き、興趣を盛り上げられないことも確かだが、それだけにまた、他の紀行文にはない、複雑で多様な旅の姿を描き出すのである。

注

- (1) 「文学」46号「刊本『夏の小文』への視座——『紀行』と『記』と『道の記』と——」。
- (2) 人物書「本居宣長」。
- (3) いずれも仮題の写本で外題はこの通称と若干異なる。ここで問題になる程度ではない。
- (4) 全集解題による。
- (5) 全集解題、大久保正氏。
- (6) 例えば同じく地方出身である貝原益軒の「京城勝覧」「和州巡覧記」は通常、都とその周辺の案内書とされて、「西北紀行」「木曾路記」のような紀行文とは一線を画される。しかし益軒の紀行類の最も初期の作品であるこれらの都の案内書は、彼にとって故郷を遠く離れた旅先の、辺土の旅の記と見ることは、可能である。
- (7) 宣長記念館蔵の自筆稿本を見ると、この後者の一文は、板行に際して附加されている。
- (8) 自筆稿本。(7)を参照。

三

「菅笠日記」の写本と板本は付記に述べるように多く残るが、い

れも序跋を有しないため、この点からは当時の評価をうかがい知ることはできない。ただ、板本が多くの刊記を持つこと、宣長の歿後、彼の二つの旅中詠草「結びすてたる枕の草葉」「紀見のめぐみ」が、大平の「名草の浜つと」と組みあわされて「双玉紀行」⁽¹¹⁾「（巻頭内）両大人紀行」などの名で板行されること、文化二年に岐阜の国学者岡田貞鑑が記した吉野紀行「花見の日記」⁽¹²⁾の前半がほぼ「菅笠日記」と文章が同一で、あたかも宣長の旅をなぞるような紀行文となっていること、などから見て、かなり広く愛読されたようである。

近代にはいつてからは、宣長の全集以外では有朋堂文庫「日記紀行集」(昭和四年)、研究社学生文庫「菅笠日記」(昭和十五年)が翻刻紹介した。後者には初めての全口語訳が附されている。

それらの解題、あるいは、宣長伝や近世紀行関係の書における、この紀行への評価を見ると、「温雅な文章」「優に一つの研究旅行」(村岡典嗣「本居宣長」)、「暢達雅麗な擬古文体」「優に立派な研究旅行」(筑摩版全集解題)、「明快にして達意の文章」「しかし菅笠日記の注意すべき所は右の歌文の体にあるよりは寧ろ文中に屢屢見える古代への深き憧憬と緻密な臨地調査と犀利な考証」(研究社学生文庫解題)と、文章の魅力と、研究旅行という性格が注目されている。その擬古文が「明快」「達意」、また「折々随感の詠歌と、古典学者としての感懐や考証が融和して行文を引き締め、冗漫に陥らぬ」(筑摩版全集)、「輕妙」「隨筆のスタイル」(鈴木棠三「近世紀行文芸ノート」)と、ある種の歯切れよさを持つものとしてうけとめられていることに注意したい。宣長の擬古文にはその語からともすれば連想される冗調さや難解さが少ない。「彼の和文の明晰さ、論理性は、若いころけんめいに漢文を書いたの、意

識的無意識的な結果ではないか。」「漢文に訳しやすい和文である。」と吉川幸次郎氏は「本居宣長」中に述べる。とりわけ「菅笠日記」の場合、日記の性格が強いことから、平易な、記録的な文体をとりやすいのであろう。

しかし文体そのものに関しては、画期的な新しさはない。その点は「文芸的に高く評価の出来ぬ」と断じた鳴神克己「日本紀行文芸史」を一概に否定できない。「菅笠日記」の場合の宣長の和文の価値は、その正統的で優雅なあくのなさで特色のなさが、この紀行の持つ内容の複雑さと多様さを、ゆがみなく自然に描き出していることに、まず求められねばなるまい。従来の研究者たちが、文章の評価とともに研究旅行としての性格をこの紀行の価値として強調したのもそのためであらう。とりわけ壬生勤氏が研究社文庫解題で、「古代への憧憬」「臨地調査」「考証」の三つに「菅笠日記」の主要な要素を見ておられるのは的確である。

だが更に検討するなら、この作品は研究旅行の記録としては必ずしも充分と言えない。鈴木棠三氏が「考証自体が軽妙であり、また議論を正面に押出さず、随筆的スタイル」と言われたように宣長は「旅路の日記」に「さかしら」はふさわしくないという意識から、考証は自制していると見る。なお鈴木氏は、「有朋堂文庫日記紀行集解題」で塚本哲三氏が「菅笠日記」を「大部分は地理歴史に関する考証にして、紀行文としては格別面白きものにもあらざれど」と言われたことに疑義を表明されている。塚本氏のこの評価には私も疑問を持つが、収録された他の紀行への評価とあわせて見ると、氏は表現内容ともに紀行文としての一定の形式を整えたものを賞されているようであり、宣長の作品には紀行文としての緊張と完成度が

欠けると感じられたのではないか。

やはり「菅笠日記」の本質は、その表面の典雅さとは逆に、「日記」という語から宣長が連想したであらう二つの方向、一つは物語とも重なるすぐれた文学作品としての完成、一つは日常の自分のさまざまな生活記録、という両者を重ねあわせて、紀行文という枠にとらわれることなく記してしまった、彼の旅の日常ということにある。そこに表現されたのは、旅よりも、彼自身であった。紀行と日記を厳密に区別することは不可能かもしれないが「菅笠日記」は吉野や大和の地が考証された旅の記録というよりは、宣長という一人の古典研究者の行動と心理がよく表現された自照文学としてとらえるべき作品である。彼自身それを目的として記しているはずである。

したがってまた、この紀行の魅力は、宣長の人物像に負うところが大きい。そして壬生氏が指摘された「憧憬」「現地調査」「考証」の三者が融合するばかりでなく、時に宣長の内部で矛盾し拮抗する姿もそこには浮かび上がってくる。

初瀬の部分に例をとるなら、そこへ現地調査に行き現実の土地にふれることは、清少納言や古歌の世界へ貝や鐘の音を通じてひたり、古代への憧憬をみたとつながらる。同時にそれは「玉葛の跡」という現実も見てしまうことである。またそれが「をかしけれ」と笑いをさそい、前の憧憬を打ち消す興ざめな事実となるのは「なべてそらごと」と源氏物語を考証できることによる。三者は互いを生み出し、また否定する。すでに存在しない時代に憧れること、それと自らの生きる時代の現実を結合させること、それらを客観的に見つめて考察すること、古典研究者が多くその統一を自らの問題とする三つの姿勢が宣長の中にも存在している。

彼はその姿勢を、あえて統一しようとはしていない。初瀬の場面以外でも

「よその国ながら。かゝる名どころは。明くれ書にも見なれ。歌にもよみなれてしあれば。ふる里びとな^{ふみ}のあへらん心地して。うちつけにむつまじく覚ゆ。」

「此山いとちひさくひくき山なれど。古より名はいみじう高く聞えて。天の下にしらぬものなく。まして古をしのぶともがらは。書見るたびにも思ひおこせつ。年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ。此度はいかでとくのぼりて見んと。心もとなかりつるを。いとうれしくて」

「そも御陵の御事をしも。などかくものぐるほしき迄たづねまどひありきて。くはしうは書き記せるぞと。とがめん人もありなめど。末の代までいと上りての代の物の。まさしくこれよと残れるは。これよりほかに有りなんや。ことにこのうねび山なるどもは。あるが中にも古く。それとたしかにはたあなれば。としごろ心にかけつ。いかでくはしくまうでて見奉らんと。ゆかしく思ひわたりつる物をや。されどいづこなるもたゞ同じさまにて。珍しげもなく。何の見るめしなき所々なれば。たゞおのがやうに。古をしのぶ世のひがものならでは。わざとたづねて見ん物とも思ふまじければ。あなあぢきな物あつかひやと。世の人のおもふらんも。さりぬべき事なりかし。」

と古代への憧憬は、「じんにくん」をはじめとする里人の描写と並べて、力をこめて語られている。

そして彼は最後に、古跡を熟知する吉田村の翁から、地元で御陵

があるとわかると役人が来て保存の処置などうるさいため、わざと知らぬふりをする里人も多いという事実を聞き、「里人のことを思いやって保存の処置をとるべきだ」との見解を記す。彼の里人への接近と現地調査はついに、そこまでの村の生活の実態につきあたり、ここには古代への憧憬と現実の認識が一致してゆく、一つの可能性が見えている。

しかしそれは偶然の幸運な例である。宣長の古典研究者としての姿を、よりよく表現しているのは、むしろ、この紀行の中心である吉野水分神社参詣の部分であろう。この参詣は彼のこの旅の主要な目的であり、この神社に両親が祈った結果生まれたという自らの出生の自覚が、彼にとってどれほど重要であったかは多くの人が指摘される。宣長はこの参詣にあたり、

「さるはむかし我父なりける人。子もたらぬ事を深くなげき給ひて。はる／＼とこの神にしもねぎごとし給ひける。しるしありて。程もなく母なりし人たゞならずなり給ひしかば。かつ／＼願かなひぬと。いみじう悦びて。同じくは男子えさせ給へとなん。いよ／＼深くねんじ奉り給ひける。われはさてうまれつる身ぞかし。十三になりなば。かならずみづから率てまうでて。かへりまうしはせさんとたまひわたりつる物を。今すこしえ堪へ給はで。わが十一といふになん。父はうせ給ひぬると。母なんものの序毎にはのたまひいでて。涙おとし給ひし。かくて其としにも成りしかば。父の願はたさせんとて。かひ／＼しう出でたゝせてまうでさせ給ひしを。今はその人さへなくなり給ひにしかば。さながら夢のやうに。」

思ひ出づるそのかみ垣にたむけして麻よりしげくちる涙かな

袖もしばりあへずなん。かの度はむげに稚くて。まだ何事も覚えぬほどなりしを。やうやう人となりて。物の心もわきまへしにつけては。むかしの物語を聞きて。神の御めぐみの。おろかならざりし事をし思えば。心にかけて。朝ごとには此方にむきてをがみつゝ。又ふりはへてもまうでまほしく思ひわたりし事なれど。何くれとまきれつゝ過ぎこしに。三十年を経て。今年又四十三にてかくまうでつるも。契あさからず。年ごろの本意かなひつるこゝちして。いとうれしきにも。おちそふ涙は一つなり。」

と、今は亡き父母をしのび、この神への愛情を語る。彼には珍しく熱のこもる文章で、伝記などにも引用されることが多い。板本の中にもこの部分の余白に読者が宣長の父母の歿年を書きこんでいる例があり、強い印象を受けていることが推測される。

宣長のこの感動はむろん本心であろう。しかしその直後に、次のような文章がある。

「かゝる深きよしあれば。此神の御事は。ことによそならず覚え奉て。としごろ書を見るにも。萬に心をつけて尋ね奉りしに。吉野の水分神社と申せしぞ。この御事ならんと。はやく思ひよりたりしを。続日本記に水分峯神ともあるは。まことにさいふべき所にやと。地のさまも見さだめまほしく。としごろ心もとなく思ひしを。今来て見れば。げにこのわたりの山の峯にて。いづこよりも高く見ゆる所なれば。うたがひもなくさなりけりと思ひなりぬ。ふるき歌に。みくまり山とよめるも。この所なるを。その文字をみづわけとひがよみして。こと所の山にしもさる名をおふせたるは。例のいかにぞや。又みくまりをよ

こなまりて。中頃には。御子守の神と申し。今はたゞに子守と申して。子孫の栄えをいのる神と成り給へり。さて我父も。こゝにはいのり給ひしなりけり。」

ゆかりの深い神社と思えばなつかしく、その名や由来を考証した結果彼が到達しているのは、「水分」が「子守」と変化して、子孫繁栄の俗信の対象となった事実である。「菅笠日記」の他の部分で宣長は、「大かたいにしへ名ありける御社ども。いづくのも今の世にはすべて八幡天神。さては牛頭天王などのにのみ成り給へるぞかし。」と嘆じており、それを考えると、この水分神社に関する考証が、前の感動の否定にもつながりはしないかという疑問が生ずる。事実宣長は、「ここが子孫の栄えを祈る神となった。それで父も祈りに来た」と叙述して筆をとめる。それ以上書けば、この紀行の中心ともなるべき心情が崩壊するのをおそらく彼は予想している。

それでもこの考証をこゝまでは記してしまうのは、すべてを記録していく、この紀行の執筆姿勢によるとしても、はたして宣長自身の中で、このような考証と、古代への憧憬と共通する感動との、一致への努力はなかったのか。それを検討する余地は今はない。ただおそらく、

「なべておほかる方をもて、いかにもく物は定むる事ぞかし。」(石上私淑言)

「後の世によき説のいであることおほし。」(同上)

「すべてなべての人のねがふ心にたがへるを雅とするは、つくりことぞおほかりける。」(玉勝間)

「たとひかくくしくなるかはありとて、とにかくに世にひろまるこそよけれ。」(同上)

「道にかなはずとて、世に久しく有りならひつることを、に
はかにやめむとするはわろし。」(同上)

のように、現実と自然を肯定し、更には、

「タトヘハ花ヲミテサノミオモシロカラネト、歌ノナラヒナ
レハ、随分面白ク思フヤウニヨム、面白ト云ハ、偽リナレド、面
白キヤウニヨマムト思フ心ハ実情也、シカレハ歌ト云モノハ、
ミナ実情ヨリ出ル也、ヨクヨマムトスルモ実情也、ヨクヨマム
トオモヘト、ヨクヨメバ実情ヲウシナフトテ、ワルケレトアリ
ノマヽニヨム、コレ、ヨクヨマムト思フ心ニタカフテ偽也、サ
レトモ、実情ヲウシナフ故ニ、アリノマヽニヨマムト思フモ、
又実情也」(あしわけをぶね)

と、偽に忠実である真実もまた認めていこうとする徹底した思考
が可能な彼ならば、それらの矛盾や混乱を、そのままに抱き続ける
ことの中に、生き方の誠実さをむしろ求めていたかもしれない。

「菅笠日記」は、そのような彼の本質が、優雅な和文で語られる一
見雑多な記録の中に、確実に表現されている。それは、単純なかた
ちでの感動を許さず、その意味で散文学としての性質をきわめて強
く持つ紀行文であるといえよう。他の近世の多くの紀行文が地誌的
な要素を加えることによって新しさを生み出すように、宣長は、「
日記」を生活記録という自由な形式と意識することによって、従来
なかった複雑な性格を紀行文に付与することに成功しているのだ
る。

注

- (1) 前者は文化十二年刊。後者は享永七年刊。
- (2) 刈谷図書館村上文庫自筆本。
- (3) 東北大学無刊記本。

付記

国書総目録には「菅笠日記」の写本10点と板本42点をあげる。こ
の内、旧下郷、丸山、など12点は未調査または所在が確認できない
ため、残り40点及び他に存した8点について記す。

写本には稿本系のものと板本を写したものがあつた。前者は宣長記
念館蔵の自筆稿本と表記、内容がほぼ同一で、稿本段階である程度
書写により流布した模様である。大阪府・筑波大・宮城小西・無窮
神智は前者、国会・天理・東大は後者である。

板本はいずれも同板だが十七種の刊記がある。文字や枠の欠損状
況により大きく三群に分れる。

第一群は、第一冊寛政八月新板広告・第二冊寛政七年刊記(岡山
大池田・早大・高山香木⁽³⁾)、寛政十一年刊記(筑波大・東北大⁽²⁾・
神宮・東大・豊橋)、寛政八年新板広告(岡山大・京大・内閣・成
田・宮書)の13点。第一冊23丁オ「村上」、第二冊22丁オ左下の
が傷つく他は板木の状況がかなりよい。

第二群は、寛政七年刊記(刈谷・宮書・東大)、「弘所」三書肆
連記(大阪府朝日・金沢大・国会・早大2点・宮書)、二段広告七
書肆連記(岩国・学習院・慶大)、無刊記(東北大)の13点。第一
冊1オ左下「い」、10オ左中「目」、第二冊2オ右枠など、第一群
より新たに十数ヶ所の欠損が加わる。

第三群は、十書肆名連記(大阪府石橋・お茶の水⁽²⁾・無窮⁽³⁾・九
書肆名連記(内閣)、七書肆名連記(九大・無窮⁽³⁾)、河内屋他十

書肆名連記（東北太）、錢屋惣四郎單記（秋田・日大）、文海堂柏屋單記（早大）、前川善兵衛單記（大阪市大森）、山城屋單記（大阪府）、山城屋單記（金沢大）の13点。第一冊8丁ウ右上「う」、17丁ウ左上「ろ」、第二冊8丁ウ下枠など、第二群から更に二十余ヶ所の欠損が加わる。

なお、調査時の不備により、上記傍線の本と、寛政十一年十四冊広告（慶大）、無刊記（神宮）の2点は、いずれの群か未確認である。

この三群中にも細かい異同が存し、興味をひく点もあるが、本論の主旨でないため、省く。

注

- (1) 長野県立図書館の所蔵分にはない。
- (2) 板本との異同は、津屋庄を城と記するなどの表記の異同、初瀬の仏を拝む際などの仏教崇拝の語句の存在、二の(7)註に示すような数ヶ所の「旅路の日記」観の欠落などが主である。これらを訂正、附加する附箋が稿本には三十四枚存するが、稿本系の写本には、附箋にある記事は見えない。
- (3) ただし岡山山大と早大の2点は寛政八年の部分を埋木する。この3点は、第一群中でも特に欠落が少なく、第一冊25才右上「を」、41丁オ「所々に」が完全なのは、これらのみである。
- (4) 大阪府のものとは同一だが、書肆の住所が異なる。